

言語地図における凡例の本質についての研究

江端義夫
(1991年9月30日受理)

A Study on a Essence of a Legend of the Linguistic Atlas

Yoshio Ebata

Linguistic Atlases seem to be roughly devided into two kinds. One is a map described by dialectical phenomena and the other is the atlas of signs.

This sign-atlas that came from Marburg University in Deutsch, may be more familiar than that.

Two different methods of a legend style are found, too in Japan. One is a KOKURITSU-KOKUGO-KENKYUSHO method, the other is the HIROSHIMA-GAKUHA method. The latter is the legend which means "the structure of dynamic relation of the local languages".

はじめに

かつて、筆者は、言語地図を用いて言語史を研究する方法に関して、二つの潮流を帰納し、報告したことがある。外国語に不案内であるために、粗雑な観方しかできなかつたが、少なくとも、当該学問の歴史的現在を把握する上で、大きな意味があつたと思われる。

国立国語研究所が『日本言語地図』全六巻を出版して、地理言語学のめざましい隆盛を招来させてから、社会言語学的研究へと人々の関心が移り、一定の年月が過ぎた。あらためて、国立国語研究所が『方言文法全国地図』を出版しはじめるに及び、従来とは異なつた認識の下に、言語地図の研究を行うべき段階を迎えたのである。筆者は、位相論的視点を取りこんだ言語地図の研究が望まれるようになった状況を指摘し、当該研究の新しい時代が来たことを小述したことがある。

このような、新しい時代に入った地理言語学の健全な方向を見定めるために、筆者は斯界の進展過程を眺望し、ことの理の本質に照らして考察することの必要を感じている。方言の研究は、根本的に、ものごとの真実、人間的な真実の究明を目的とするが、常に大切なのは、「なぜ?」を問う精神ではなかろうか。

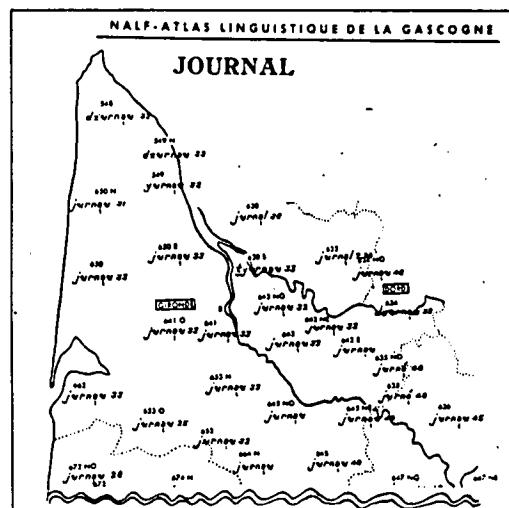
そこで、筆者は、本稿において、日本の地理言語学の展開上、ほとんど問題にされたことがなかつた「凡例」について、問題をなげかけてみたいと思う。実は、ここにこそ、言語地図の本質が現れているのである。

一、『事象地図』における「凡例」の意味

上述の「はじめに」の中で、言語地図の地図学的(すなわち、製図学的)方法に二つの潮流のあることを述べた。それは、ロマンス語系の『事象地図』とゲルマン語系の『符号地図』のことである。

本章で問題とするロマンス語系の『事象地図』は、図①で見られるように、白地図の上に、方言事象が直接に書き込まれる方式のもののことである。

図①



図①の J. Ségy によるフランスのガスコーニュ地方の言語地図では、調査地点番号のすぐ下に、得られた方言事象が、そのまま書きこまれている。忠実な音声表記になっている。複数の語形が並記されてもいる。方言事象は白地図上に出し、意味や用法についての説明は、欄外か脚注に一括してまとめている。

このように、ロマンス語系のフランス語、イタリア語、スペイン語などの言語地図は、およそ図①と同じ手法に則って作図されている。ゲルマン語系の言語地図のように、符号に代弁させて、記号の抽象化を行う操作に出ないのである。資料としての方言事象というものを、まず確実にとらえることが第一段階に存する。その上に、解釈地図が作られて、等語線が引かれたり、地点間の方言距離測定がなされたり、あるいは、方言量の計測が試みられたりして、それらが白地図上に大胆に出されるのである。これが非常に合理的であるために、事象地図の素朴さと解釈図の鋭さとが見事に調和して、科学的なものになっているようである。いわば、素材図としての“事象地図”が目指されている。それを万人共有の財産とした上で、これを利用した自在な解釈図が、白地図上に描述されるものと解される。きわめて明晰である。

日本の言語地図の歴史には、これが全く、根づかなかったのは、不思議である。この手法でならば、言語地図に符号を押してゆく“符号地図”に必要な凡例は、ほとんど不要なものとなる。

したがって、以下では、ロマンス語系の言語地図における“事象地図”については言及しないことにする。言語地図を研究の方法として活用する際に、凡例が大きな意義をもつのは、“符号地図”に限られるからである。世界の言語地図を研究する上で、ゲルマン語系の流れを汲む学派と、ロマンス語系の流れを汲む学派とが分かれてとらえられることに、注意しなくてはならない。確かに、地理言語学の學的確立はフランスにあると書われてきたし、まとまった成果も、ロマンス語系のものに目立つとされよう。しかし、実に、言語地図に関して、日本の學問土壤には、フランス語系のやり方が定着しなかったことは、一つの事実として認めておかなくてはならない。

二、“符号地図”における Deutscher Wortatlas の凡例について

ドイツの G. Wenker がマールブルク大学で、地理言語学を始めた。調査の実施を通して、19世紀の末における歐州の方言研究のメッカが、この地に築かれたことは、周知のことであろう。その後、マールブルク大学の研究所の所長が Walter Mitzka になったとき、次

の所長の Ludwig Erich Schmitt と共同で、通信調査での Deutscher Wortatlas がつくられ、完結した。これは、日本の方言研究界では、あまり高く評価されていないかに見えるけれども、解釈よりも事実としての符号地図を優先して出版してゆくというものであり、戦後の日本の研究状態とよく似ているので、注目しておきたいと思う。

さて、Wortatlas の10巻の第10図に、「ゆきの花」Schneeglöckchen の凡例と言語地図がある。凡例は次のようになっている。出版は1960年である。

図②

Schneeglöckchen	
I Schneeglöckchen	< Märzenblümchen
L Schneeglöckke	→ Märzglocke
T Schneeglock(e)	▼ Märzglöckchen
F Schneiglacke	✓ März(e)glöckle
J Schneeglöckel	✓ Märkglöckse
A Schneeglöckle	↗ Mär(e)legeck
Z Schneeglöckelchen	> Märzeschelle
✓ Schneeblume	— Osterblume
✓ Schneeblümchen	↪ Osterglocke
J Schneeflocke	↪ Osterglöckchen
S Schneevölichen	
Z Schneegrälfal	↖ Dolljöbke
Y Schneekicker	↓ Gollesje
Y Schneegucker	C Koallesblom
H Schniegake	↑ Kuikenblaume
B Schneekaderl	↓ Mengistondlan
P Schneekätter	↑ nakend Wiefkes
Y Frühlingsblume	↑ nackte Jufferken
N Hornungblume	↑ Naktärsknen
N Hornunglock	○ Sejrüsje
H Märzenbecher	↪ Schlangenblume
H Märzenbecherchen	↑ Vorwitzchen
< Märzenblume	✗ witte Wievkes
Zahlen bezeichnen Seitenheiten und Mehrfachmeldungen	

方言事象の群落ごとにまとめられ、標準語形に近い語形から先に並べられている。そして、発想の異なるものが、最後に一括してある。

ここで、さらに詳しく、語形の変化と符号の変化との対応を見てみようと思う。事象地図とちがって、この符号地図のばあいは、語形の変化を、どのように解釈して、言語の法則に対応させ、それに見合うべき符号にどう代替してゆくかという点に、研究者の力量が問われているからである。抽象化の作業がここにあり、

それは、単純なことのようだが、きわめて高邁な識見が要求される作業である。

図②では、Schneeglöckchen が、Schneeglöckke に移行したのに対応させて、符号の縦線の下部から短小の横線を付加させている。つまり、ch の脱落に伴う-k 音化を口蓋化と見て、その現象に一定の符号が与えられている。たしかに、短小の横線を付加された符号が、口蓋化の現象を担っていることは事実である。たとえば、Schneekieker が Shneegucker に移る場合とか、Hornungsblaume が Hornungglock に移る場合とかは、k→g, s→g の動きに注目して、符号が当てられてもいよい。

しかし、語中の変異に注目するのと、語尾の変異に注目するのとで、符号の当て方が、必ずしも統一できているとは言いがたい。たとえば、Hornungsblaume が Hornungglock に移るばあいと、Märzglöckchen が Mäteklockske に移るばあいとに、同一現象を表す短小横線符号が与えられている。これは、合理的とは言いくらいものである。

また、符号の心理から考えてみて、縦線符号で表された Schneeglöckchen と斜線で表された事象の Schniegake とを了解した上で、横線で表された事象の Osterblume を容認することは、おそらく困難であろう。

事象の変異の自然性と対応する符号の規則、およびその表現効果との三拍子が緊密に対応していかなければならぬ。しかし、図②では、面符号を使わないで、線符号だけで表そうとしたところに、無理が出ていている。線符号で補助符号化する方法に限界がきたとき、面符号を用いるのは、どういう場合であるか、などを考えておかなくてはなるまい。

所詮、符号を用いて言語地図を作製することは、どんなに資料図たらむことを配慮したとしても、本来的に方言事象の記号（符号）化という飛躍の次元へ移しかえているわけだから、解釈図といわざるをえない。解釈図であるのだから、語形の微妙な変容があつても、それがとりあげられて新しい符号になる場合もあれば、少しの変の事象は、そのまま見すごされるということがあつてもよいのだ、ということになる。

三、Siebenbürgisch-deutscher Sprachatlas における凡例の体系性

以下の図3は、1961年に、マールブルク大学のスタッフの Karl Kurt Klein と Ludwig Erich Schmitt らによつて、作られたものである。Dorf の図は、ドイツでは共通語になっている Dorf を、トランシルヴァニア（ルーマニアの一地方）ではどのように言うのかが求められている。したがつて、Dorf は、目立つ符号が与えられ

図③

'Dorf'			
Satz 39: ...und ...Schäfchen vor das Dorf gebracht.... (DSA 7; Einf. 21/22)			
● Dorf	/ Gəmaɪ̯n	◆ Gəməlt̩	→ Jəmɪ̯n
◎ Dorf zə	✗ Gəmoɪ̯n	◆ Gəməlt̩ zə	→ Jəməlt̩ zə
○ Dorf w	✗ Gəməln̩	◆ Gəməlt̩ zəs	→ Jəməlt̩ zəs
◎ Dörf	✗ Gəməln̩	◆ Gəməlt̩ m̩	
● Doef	/ Gəməɪ̯n	◆ Gəməft̩	△ Gəməf̩ zə
● Döfe	✗ Gəməɪ̯n	◆ Gəməft̩ zə	→ Gəməf̩ zə
○ Döfe	✗ Gəməɪ̯n	◆ Gəməft̩	→ Gəməf̩ zə
✗ Dörf Gəməlt̩ v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	▼ Gəməlt̩ zə	
✗ Dörf Gəməlt̩ v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	► Gəməlt̩ zə	
✗ Gəmən̩ Dörf v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	► Gəməlt̩ zə	
✗ Gəmən̩ Dörf v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	△ Gəməlt̩ zə	
► Gəmən̩ Dörf v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	► Gəməlt̩ zə	
✗ Gəmən̩ Dörf v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	► Gəməlt̩ zə	
✗ Gəmən̩ Dörf v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	► Gəməlt̩ zə	
→ Jəməlt̩ (Dörf) v Gəmətn̩	◆ Gəməlt̩	► Gəməlt̩ zə	
 / \ = 'Dorf' fehlt in unseren Belegen, / \ = 'Gemeinde' nicht belegt, sonst beide Worttypen nebeneinander.			
Had.: ① torf		LandL: ④ torf ⑤ torf ⑥ röbel	

ている。Dorf の存在および変異形の分布が知りたいことと、もう一つは、Gəmaɪ̯n の多様な分布状況および、Dorf 諸事象との対立、接衝の状況が目的とされているのである。目的に応じて、符号の思いきった選択がなされている。

しかし、必ずしも音の変化に対応した、符号の細かな設定にはなっていない。が、符号の多様なものが、体系的に整理された事象に付与されており、さらに、目的に応じた目立つ符号を Dorf に与えるということになっている。本来ならば、共通語的な事象に対しては、線符号の単純なものを使うのが常識である。そのことをわきまえた上で、Dorf に黒丸符号を使っているところに、すでに、1961年時におけるドイツのマールブルク学派の考え方の中に、符号地図の本質は解釈図にあるということを表明していると受けとくことができるのである。

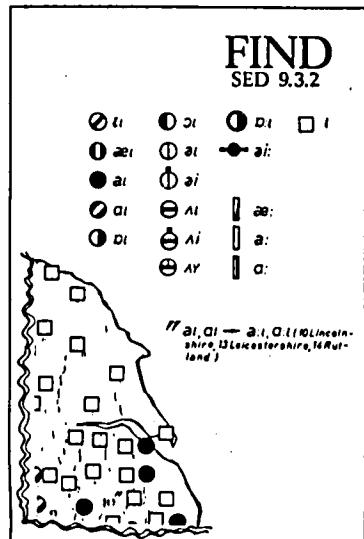
したがつて、先の図②の「Schneeglöckchen」の凡例が、方言事象の生態に忠実に符号を与えようとしたものであったのに対して、図③の「Dorf」は、方言事象の忠実な生態に符号を与えた後、さらに作り直して、作図者あるいは研究者の意図が反映した図、つまり、解釈の図を目ざしたものになっているのである。

やはり、符号地図として出発したからには、図②よりも、図③の方が、地理言語学の趣旨に合っていると、筆者には思われるるのである。

四、簡素な凡例に従った, *Atlas of English Sounds* の実態

Eduard Kolb が1979年に324図を一冊に集載して出版した。これはイギリスの音声地図である。

図④



図④では、イギリス中部のハンバー川河口の一部だけを載せている。/ai/連母音の同化を調べるためにある。符号は、微妙な音の移行をとらえるように与えられている。明瞭である。話者のコメントなどは、ほとんど見られない。項目の性質によるものと考えられる。体系よりも、現実の発音実相を重視したものとなっている。地域の狭さに対して、符号が大きすぎるために、ドイツの音語地図に親しんできた者にとっては、これが粗野にさえ見えてしまう。しかし、ドイツの調査地点は、限度を越えて詳細なのである。イギリスの場合は、音韻項目でもあるため、このくらいで正常と考えるのがよいと思われる。凡例としての独立した完成度をめざすというよりは、このイギリスの場合のように、あくまでも、言語地図に従属し、読解を手助けするものであるという位置に落ちつかせるのも、一つの見識とすべきものかもしれない。これも一つの立場である。しかし、これを参考にすべきではない。

五、言語間言語地図としての *Atlas Linguarum Europae* (ALE) に見られる凡例の到達点

言語地図の製作において、全ヨーロッパの頭脳を結

集させた仕事が、*Atlas Linguarum Europae* であるといつてよい。1983年に、その第1巻が出た。

一国内の言語地図とはちがって、国境の枠を越えて、語族と方言との関係を、とらえようとしている。日本には、こういう種類の仕事が、今までに存在していない。先達から学ぶべきことからが多い。

図⑤は、A L Eの中心的な世話をしているKruijsenの作った凡例である。これは、コンピュータを利用し、マールブルク大学のプチケ教授を中心とするスタッフが、XYプロッターで作図したものである。オラン

図⑤

mer	
mope	
sea	
Meer	
mar	
Carte onomastique	
Auteurs: J. Kruijsen et I. Stan	
Légende	
1.1	□ cal. mar, esp. mar, fr. mer, it. mare, mld. mare, marie,
	pri. mar, rou. mare
1.2	▣ all. meer, ari. (empr. all.) [mēro]
1.3	▢ blg. more, brus. mora, mac. more, pol. morsze, rus. more, scr. more, slov. morje, slva. more, arb. more, ukr. more
1.3.1	▢ empr. slaves dans fin-ougri.; komp. [mor's], komz. [more], [mor'g], mar. [mō're], mrd. [mor'a], mrdm. [mor'g], oud. [mor'e], vep. molo
1.4	▢ lit. mār, mārūs, mārēs (plur.)
1.4.1	▢ empr. balt. dans fin-ougri.: fin., est., car., vep., ingr., vol. meri, liv. mer'
1.4.2	▢ empr. finn. dans lapon: lap. mārrā
1.5	▢ balt. mor, gād. mār, gal. mōr
2.1	▢ all. see, ang. sea, frs. e. / n. see, frs. n. sin, sie, frs. o. sđ, sl. sj̄e, nl. zee, sue. sjö
2.2	▢ compositions:
2.2.1	▢ sud. hārsjö
2.2.2	▢ sud. sulitjö
2.2.3	▢ sud. storsjö
2.3	▢ lap. sāvva (07.9/945), seava (07.9/949), prob. de sjö
3.1	▢ dan. fér, nor. suð. hāv
3.2	▢ empr. scand. dans lapon:
3.2.1	▢ lap. appa (empr. anc. de hāv)
3.2.2	▢ lap. hāsse (empr. récent de hāv)
4.1	▢ lap. sjōrre (empr. de nor. nōr)
5.1	▢ lap. svitħie (empr. de solt)
6.1	▢ lit. jōra, jōrē, jōrēs, let. jōra
7.1	▢ bch. dīnges, kar. [t'en'giš], klm. tengis, krb. tengis, kum. deg'gis, nog. tengis, tat. dīnges, tchv. tīnes, trc. dēnis
7.2	▢ emprunts à la famille turque dans les autres familles de langues:
7.2.1	▢ hng. tenger
7.2.2	▢ oud. [deng'i], mar. [l'engʒi], [l'angʒi]
7.2.3	▢ abz. teng'ye, ari. [ʃen'iżi], kab. tendžye
7.2.4	▢ os. dendžye
8.1	▢ oud. [za'reż], komp. [sa'riderż], komz. [suriżżi]
9.1	▢ gr. [θalassa]
10.1	▢ strom. (grosse, grande) gouille
11.1	▢ ball. water
11.2	▢ ang. seawater
11.3	▢ ball. groot water
12.1	▢ all. ocean, ang. ocean
13.1	▢ oud. [badʒi] 'n vu'
14.1	▢ néñ. [jow̚]
14.2	▢ néñ. [juñ̚]
15.1	▢ alb. dēt
16.1	▢ basq. itsasoa, itsasua
17.1	▢ gr. [ju'nos]
18.1	▢ mit. bahar
19.1	▢ kab. adig. xy
20.1	▢ tab. lex. agl. g̚w̚y
21.1	▢ g̚nz. tsz̚. [m'odu]
22.1	▢ ichn. ing. xuord
23.1	▢ avr. [ra'od̚i], avx. [r'að̚a], bag. [r'eihə], beg. [r'nib̚əull], hot. [r'ehe], pub. [r'ek̚əb̚], gab. [r'otk̚əd̚], kri. [r'eð̚əul], ichm. [j'eð̚ə], ind. [r'ek̚əu], xva. [ru'ð̚əu]
24.1	▢ and. [r'að̚o] t'engizzi (cf. nr. 7.1.)
25.1	▢ ari. [ðað̚i], erg. urku, lak. k̚h̚i'ri
26.1	▢ rma. [ðerj'uv], rd. [dej're], tsax. [ðerj'oh], tte. derja
27.1	▢ rom. [b'aro p'ap̚i], kal. [baro p'ap̚i]
	▢ pas de réponse

ダでKruijsenらが統括し、作業はドイツでなされている。ALEの全欧協力体制の見事さに驚嘆せざるをえない。

凡例の初めに四角符号で、カタロニア語のmar, イスパニア語のmar, フランス語のmer, イタリア語のmare, ポルトガル語のmarなどが、一括され、一つにまとめられている。おもしろいのは、この四角系符号が、ラテン語のmore, ポーランド語のmorze, ブルガリア語のmoreなどへと共通の枠を広げていることである。ドイツ語のばあいもMeerであるから、イギリスなどのアングロサクソン地域でのsea, ノルウェー語のzeeなど、狭い地域を残して、ヨーロッパの広範囲にわたって、merという母音mと流音rとで海を表す言い方が認められるのである。凡例は、言語間の方言相関表でもある。

ALEの図を眺めていると、言語の恣意性とは言わながら、耳から生の音を聞きとて、意味を覚えてゆくという人間言語のあり方が、事実として示された貴重な成果に、敬意を表さないではいられない。

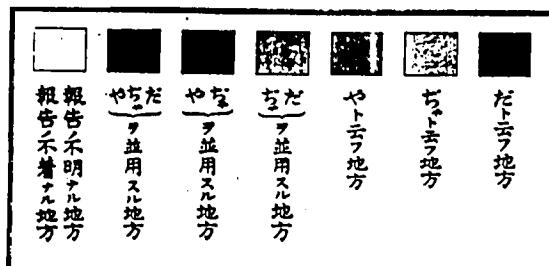
ただし、ALEの凡例の符号法には問題がないわけではない。線符号の近似に対して、語形の近似が対応していないばあいがある。全欧を射程におさまっているために、一地点一符号となっている。こうした簡略化はコンピューターの利用のために、避けられなかったことかと思う。しかも、フランス国内では、方言と民俗の言語地図が、数十年來の仕事として蓄積されてきており、そこでは、白地図上に方言事象を書きこむやり方の「事象地図」であったが、それらの知恵を通して、ALEの方法を選んだのである。事象地図よりも符号地図の方が、時代に即応しているとされたのである。又、全欧を統合して展望するためには、繁よりも簡を優先させたというのも、注目したい点である。

六、日本国における言語地図の凡例

(1) 「口語法分布図」の凡例について

明治39年に国語調査委員会によって編纂された「口語法分布図」は、色刷りで、凡例は概括的な表示形式

図⑥



になっている。凡例を見ると、「～ト云フ地方」とあり、「地点」ではない。科学的具体性に欠ける点が、惜しまれる。抽象のレベルがもう一段階下であることが望ましかった。日本の斯界の出発が、個 individual の発話の伝播や方言の生成流転という境にはなくて、方言の行われる地方を区画したり、指定したりするところに興味が存したことは、凡例のことばづかいによってでも、容易に察することができる。

さて、この方法や見方は、その後、多くの研究者に受け継がれた。が、いきなり「地点」を飛びこえて、「地方」を目指すのは、手順のルールに反するものとして、敬遠されてきてはいる。

(2) 「糸魚川言語地図」の凡例について

柴田武博士のお仕事は、地図と解説と英文篇との三点セットで上・中・下巻を成す。豪華である。1988年。

図⑦

△ tampopo
❖ tampompo, tʃ ampompo
▲ tampompon
/ tampoko
/ tampuku
x tamboku
x tagkoro
○ kužina
◎ kužirana
⊕ kužirabana
* kotsukotsu
katſikatſi
■ kajkan

「タンポポ」の凡例を見ると、凡例が狭いせいかもしれないが、諸事象間の語類の遠近や相似に着目した符号の設定には、あまり関心を示しておられないようである。tampopo が三角であるのに対し、tampoko が斜線である。この対応関係を頭に置くとすれば、次の Kužina, Kužirana, Kužirabana は非常に近い丸系符号になっているのが気にかかる。

コンピュータを用いて言語地図を描くばあい、その媒体の能力に制約されるということはあるのかもしれない。符号の大小も見られない。一列に、冷静な顔をして、それぞれの個性をもった方言事象が整列したものというのが、凡例の内容であろうか。

別な言い方をすれば、「分類語彙表」というものが凡例上に示されているとも言えなくはない。しかし、wortatlas で見られたような、語類間に、間隔を設けるという方式は、とっておられない。柴田博士が、かつて、「日本言語地図」をつくっておられた時には、語類間の間隔を、設けておられたこともあった。今は、さらに、抽象化を旨とし、余分な情念を排したものとみなされようか。

(3) 「日本言語地図」の凡例について

図⑧は、291図「おいしい（美味しい）」の凡例である。全国的に見て共通語形である OISII と、九州の代表的な語形の OISIKA を別格として、冒頭に出している。その他は UMAI 系統が一連のものとして序列化された。符号のあて方は、語形の微妙な変化をよくとらえたものになっている。こういう方法は、先にドイツの wortatls で確認したが、それをもっと精密に洗練したものという印象が強い。1975年。

図①

おいしい（美味しい） tasty		
▼ OISII	— NYAA	▼ MAHAN
● OISIKA	← NYAEE	▲ MASAAM
↑ UMAI	△ NYAKA	◆ MASAAN
↑ UMEE	◆ NYACA	▲ MAAHAAN
↑ UME	● NYAKYA	▼ MAAASAN
↑ UMAA	○ NYA	▷ MASAN
↑ UMYAA	● NYAA	▷ MAASAN
↑ UMII	○ NYEE	▼ MAAHAN
↑ ONE	● NYE	▷ MAAHAN
↓ UNMAI	● NYAKA	◆ MAAN
↓ UNMEE	● NYACA	▲ MASSAN
↓ UNME	● NYAKYA	● MAAI
— NMII	▲ NYASYAALI	● MAASA
— NMEE	▲ NYASAAN	● NASA
— NME	— NYASAN	

この方法は、いわば国研方式とも言われ、日本各地で模倣され、普及した。もちろん、「日本言語地図」に関係した研究者が、のちに、各地で、各自の取り組みを実施し、適用していった功績も見逃せない。

(4) 「夷隅川流域方言地図」の凡例について

1983年に、徳川宗賢教授の指導で、学習院大学の学生の作成した言語地図がある。図⑨は、徳川教授の凡例である。

カメンコムシという方言事象とカンバという方言事象とミズスマシという方言事象とが、特に大きな目立つ符号を与えられている。共通語形のゲンゴロー他の方言事象は、小さな目立たない符号になっている。このように、はっきりと目的を前面に打ち出した凡例は、正に解説図の中でも、仮りに言ってみるならば、“説得図”とか“力説図”とか“説解図”とかと命名すべきものかもしれない。

しかし、人によっては、図⑧のように、符号の大きさが一定である方が、個々の方言事象の訴えを平等に取り扱った処置だと反論するかもしれない。これに対して、「日本言語地図」に関与しておられた徳川教授が、強いて、図⑨のような凡例を、後につくられたのには、相応の学問的展開があったにちがいないと推察したい

図④

源五郎 10	
分類	
1. ● カメンコムシ	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
2. ▲ カンバ	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
3.	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
4.	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
5. ■ ミズスマシ	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
6. ○ ゲンゴロー	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
7.	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
8.	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
9. ◎ ゲンゴロマジ	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
10. + ミズスマシ	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
11. △ タマンボ	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
12. ◆ その他	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }
N. 合計	{ OISII / NYAA, NYAEE, NYACA, NYAKYA, NYA, NYEE, NYASYAALI, NYASAAN, NYASAN }

のである。つまり、どのように客観的に作図しようとしても、作図者の個性が發揮されるものである。それならば、言語地図から、言語史が浮き立つように、積極的に符号化をしてみよう、という立場である。これは、正当であろう。即ち、図⑧でも、歴史的には、UMAI の方が OISII よりも先行されなければならないのに、共通語を優先させるという原則を設けて、逆にしていいるのである。

したがって、図⑧と図⑨とには大差がないのである。

(5) 「兵庫岡山県境言語地図」の凡例について

1991年の発刊である。鏡味明克教授の編集されたものである。これは、先の「糸魚川言語地図」の配符法

図⑩

第32回 風	
— イカ	
— イカノボリ	
— イカアゲ	
● タコ（墨用）	
● タコボリ	
△ タケ	
△ タカノボリ	
■ イカタコ	
■ イカタコ	
● タコイカ	
* ヨカベー	
* ヨカカンベ	
※ イカノコ	

によく似ているかと思われる。語類間に隔てをつくるないのである。しかし、同類内の語には、同じ形の符

号が付与されている。方言事象は、当該地方での基幹と見なされるものを先行させており、必ずしも共通語だからといって、優遇してはいない。あくまでも地方ごとの言語史をめざす方向に視点が置かれているようである。

(6) 「中国地方五県言語地図」の凡例について

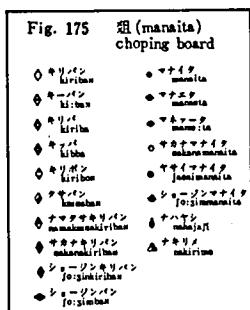
1965年に、廣戸惇博士が主に独力で5県を踏破されて、言語地図を出版されたものである。美麗な符号が

べきであろう。筆者はこの方面に不案内であるために、残念ながら、多くを語ることができない。しかし、今まで筆者は、凡例の質のことばかりを問題にしてきたが、図⑩では、方言事象の総量が記されている。この点は、さすがに、コンピュータ言語地図らしい凡例だと思わせられたことである。

(8) 「方言文法全国地図」の凡例について

これは1989年に、国立国語研究所が編集し刊行したものである。

図⑪



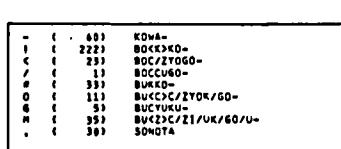
多いのに感心する。凡例という欄が特設されているわけではなく、地図の左上の空白が主に凡例と定められ、そこでまかないきれないばあいには、空いている所を次々に使うという方式である。

図⑪は、図⑩と同じように、語類の境域を設定しないやり方を取っている。しかも、当該地方での主要な方言事象を先行させて扱い、共通語のマナイタを、優先させてはいない。これらは、図⑩と図⑪との方法のきわめてよく似ていることを物語る興味ぶかい点である。

(7) 「最上地方新方言図集」の凡例について

図⑫は、1980年に、井上史雄、永瀬治郎、沢木幹栄の三氏によって編纂された地図集の凡例である。線符号とアルファベット符号とが用いられている。

図⑫



これは、コンピュータ利用のグロットグラムである。凡例はきわめて簡素であり、符号の大小も認められない。ただし、コンピュータ利用の図であるというところに、特色があるのであろう。一地点に2事象の併存も描き出されている。先述のヨーロッパ言語図巻（ALE）の凡例ほどの精密さが、今後に求められてゆく

図⑬

雨が (降ってきた)	
● <ga> ga, ya	△ <nu>
● <ga> ga, wga	△ <nudu>
● <gu>	▼ <nutu>
● <a> a, a	▲ <N>
● <(amza)>	▲ <ndu>
● <(amia)>	▼ <>
● <e> e, ie	
○ <ja>	↓ <(AME)>
● <(amejaa)>	↓ <(amee)> amee, amg;
● <(amja)>	↓ <(amii), (amil)>
● <(amja)>	
● <(ame)> ame, amae	● その他
● <(ame)>	
● <no>	● その他のにおける他の話者の回答

語類ごとに分類がなされ、区分されている。格助詞の「が」に相当する部分のオーソドックスな表記になっているようである。先の「日本言語地図」のばあいと若干の相違が見られる。即ち図⑬の凡例は、図⑩のように、順番からすれば後半にあるものを共通語だからと1行頭に持ってくるようになっていない。

七、いわゆる「広島学派」の言語地図における「凡例」の歴史的構造主義

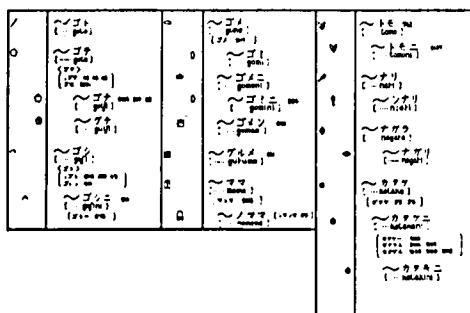
(1) 「瀬戸内海言語図巻」の凡例について

広島学派の元祖は藤原寺一博士である。多くの独創的な考え方を実行され、関与されたところで、必ず革新的な企てをさせてきている。言語地図の凡例に三段階法を持ち出されたことは、特筆しなければならない。

次の図⑭では、副助詞「～ごと」の凡例を掲げる。符号が三段階に出現し、従来の一本調子の凡例に慣れている目には、奇妙に映るかもしれない。しかし、これは、方言事象群の中での派生関係を構造化してとらえるのに有益である。又、諸事象間の距離が、微妙に

工夫されており、説明は無いが、注目される。

図⑩



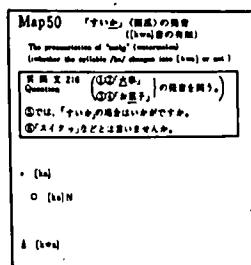
この凡例の最大の特色は、符号ごとに、分布地域を代弁させたという点である。線符号は共通語、全域分布、三角形の符号は近畿域分布、丸符号は中国域分布、菱形符号は九州域分布、いちょう形と五角形の符号は内海東部分布、その他は特殊符号というようになっている。

多くの挑戦的な企てがなされた凡例であると思う。

(2) 「関東地方方言事象分布地図」の凡例

大橋勝男博士の凡例は、すぐ上の図⑩の「瀬戸内海言語圏」の影響を受けて成り立ったものである。

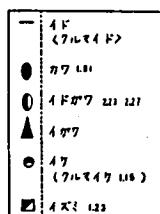
図⑪



符号が二段階に分けてある。ka/kwa をねらった図であることが示されている。1974年。

(3) 「下関市・北九州市言語地図」の凡例について

図⑫



岡野信子教授の図⑫の凡例は、図⑪や図⑯とは異なり、符号が縦一直線になっている。最近のお仕事には、図⑫のような複雑さよりも、単純明快な凡例を趣向されたものが多いように察せられる。

(4) 「大阪市域言語地図集」の凡例について

佐藤虎男教授の指導による、大阪教育大学の学生による仕事である。1983年。

図⑬

○	オマエ
/	オマイ
△	オマエサン
▲	オマハン
●	デマエ
▼	オノレ
◆	ワレ
◎	ジアン

「汝」の図の凡例に、符号の二段階仕立てが見られる。

(5) 「中部日本言語地図」(未刊) の凡例

図⑭

○	-ダラーズ [daraazu] (ダラズ) (-ダラズ 127, 130)	↑	-ペー [be] -デショ [deʃo](-デシヨ 121)
△	-ダラー [dara]- (ダラ)- (-ダラ- 514)	△	-アラ [ara]- (アラ)- (-アラ- 60, 68, 69)
●	-スラ [sra]- (スラ)-	●	-ラ [ra]- (ラ)-
○	-スラ [sra]- (スラ)-	○	-ラ [ra]- (ラ)-
+	-ジヤロー [jaro]- (ジヤロー)-	+	-ジヤロ [jaro]- (ジヤロ)-
■	-ゼー [ze]- (ゼー)-	■	-ゼー [ze]- (ゼー)-
□	-ゼー [ze]- (ゼー)-	□	-ゼー [ze]- (ゼー)-

凡例全体が一つの独立した体系を形成している。符号の移行と方言事象の変移と方言事象の変移とが対応し、全体として、当該方言事象の歴史性と体系性とを総合的にとらえることが目的となっている凡例である。

これは、筆者による三段階法の凡例である。図⑪と似ている。ただし、共通語を優先しないで、言語史に忠実に答えようという態度を示してもいる。

おわりに

巨視的にはあるが、世界の言語地図と日本の言語地図とを対象にし、その凡例の実態を掲げ、問題点を指摘した。広島学派の凡例には「方言事象体系の歴史的構造図」を構想した点に特色があり、独自性が窺われる。